

屋敷神における藁宮祭祀

笠原 春菜（國學院大學大学院文学研究科伝承文学専攻）

屋敷神の中には毎年藁で祠を作り替える事例がある。祠は竹の柱に藁や茅で屋根を葺くという簡素な物で、毎年祭日に作り替えられていた。現在は素材の入手困難や手間から石や木の祠に変えた所が多い。なぜ、藁の祠で祭祀が行われるのか。屋敷神の神屋について、直江廣治は天然の石や木から、藁宮、石造・木造・瓦製へと変化したとして、藁宮を天然の石・木と常設の祠との中間に位置付けている。その背景には去来神から常在神へという屋敷神信仰の変遷を示している。また、藁宮の以前の形態を依代としての稲藁の束とも解釈している。しかしながら、これは一部の事例を繋ぎ合わせての推察であり、確実な数の事例が示されてはおらず、これまで屋敷神において藁宮に特化した研究は行われていない。

先行研究を踏まえると屋敷神の祠の形態は大きく三つあると言える。一つ目は祠が存在せず自然石や樹木が祀られている物、二つ目は藁や茅で作られる仮設の祠、三つ目は木造、石造などの常設の祠である。その中でも藁宮祭祀には祠を毎年作り替えるという行為に重点が置かれており、古い神祭りの形態が垣間見える。それを考えるにはより多くの事例と広い視野での考察が必要である。そこで本研究では自身の調査に加え全国の市町村史及び民俗調査報告書から藁宮祭祀の事例を収集し、詳細を照らし合わせることで比較研究を行う。そして、これまで明らかにされていない藁宮の全国的な分布や様相を明らかにすることを目的とする。

収集の結果から、藁宮祭祀は全国的に分布しているが均一的ではないことが分かった。ある一定の地域にまとまりを持って分布しているのである。例えば、東日本では太平洋側の県に事例が集中し、静岡までその流れが続いている。近畿地方では藁宮祭祀の形跡はほとんど見られないが、山口県、高知県にかけてまた事例が増えていく。形状も地域ごとに差異がある。基本的な形は三種類ある。まず、束にした藁の頭を折って裾を広げた円錐形、四本の竹の柱のうち二本を高くした上に屋根を葺く片屋根の形、そして竹の柱に切妻屋根である。この形状も、地域によってまとまった分布が見られる。栃木、茨城にかけて円錐形の事例が、栃木、茨城、群馬、千葉、東京、静岡にかけては片屋根の事例が目立つ。祭日や祭神は、地域ごとにある程度のまとまりはある。特に使用される藁は新藁であるため稲刈りの時期に多く祭が行われる。その影響からか、様々な祭神名を持ちながら作神として信仰されているという事例も多くあった。

新藁で祠を作るという共通性を持ちながらその内容は多様であり、地域や家ごとに発展していったことが窺える。また、幣束や祭神の由来に民間宗教者の関与も見られ、祭祀が家だけでなく相対的に変遷していったのではないかと考えられる。藁宮という形態は家ごとに独自に生まれたのではなく、こうした人の関与によって外からもたらされた可能性も視野に入れても良いのではないだろうか。今回、藁宮祭祀の全国における様相を調査したことでその範囲の広さや地域的な差異と共通点を見つけることができ、これを発表の中心とする。